

子どもによる医薬品の事故 -日本中毒情報センターへの問い合わせ- (消費者庁委託調査 医療機関調査結果から一部抜粋・加筆)

日本中毒情報センター 黒木由美子

背景・目的

子どもによる医薬品の事故に関する日本中毒情報センターへの問い合わせは年々増加し、平成24年には5歳以下の子どもによる医薬品の事故は8,388件あった。そのため事故に関する実態を調査し、原因や事故防止策を検討した。(平成27年は約8,800件)

方法

平成24年1月～12月に日本中毒情報センターが受信した5歳以下の医薬品による事故で、症状を有した869件のうち、医療機関からの問い合わせ(171例)に急性中毒症例調査用紙による追跡調査を実施し、回答を得た112例(65.5%)について、原因医薬品、症状を整理し、入院事例を抽出した。

結果

原因となった医薬品の薬効は多岐にわたり、医療用医薬品では精神神経用剤24件、催眠鎮静剤・抗不安剤23件、抗ヒスタミン剤18件、去たん剤13件、解熱鎮痛消炎剤10件、気管支拡張剤10件の順に多く、一般用医薬品では瀉下薬12件、かぜ薬8件、鎮うん薬6件の順であった。医療機関受診時の主訴および経過中に認めた症状は、眠気・傾眠52例、嘔吐34例、ふらつき・座位不能・立位不能25例、動悸・頻脈19例、興奮15例、顔面紅潮13例、不機嫌10例、下痢・軟便10例などであった。

入院が判明した事例は46例で、入院日数は2日が26例、3日が11例と多く、死亡例や後遺症を残した例はなかった。

入院事例として①祖父の降圧剤1～2錠を飲み、夜間血圧低下を認めた1歳7ヵ月、②自身に処方された気管支拡張剤と抗ヒスタミン剤の合剤シロップ5回分を飲み、意識障害、頻脈を認めた1歳10ヵ月、③祖父の降圧剤1錠および糖尿病薬1錠を飲み、嘔吐と傾眠傾向を認めた3歳、④市販のビン入りのアレルギー用薬を最大20錠飲み、興奮、筋緊張亢進を認めた1歳4ヵ月の例などがあった。

考察

医療機関への追跡調査では、家族の処方薬を飲んだ、本人の合剤シロップを飲んだ、といった事例が多く、消化器症状、中枢神経用薬による中枢神経系の症状、抗ヒスタミン剤や気管支拡張剤等による抗コリン症状や交感神経刺激症状が目立った。降圧剤の錠剤1～2錠程度の誤飲であっても医療機関での加療や経過観察を必要とした事例が散見された。

誤飲事故防止対策として、チャイルドレジスタンスを意識した容器開発や活用が進められることや、PTP包装の苦味付けのほか、子どもが親のかばんの中から薬を取り出して飲んだり、机の上に置いていた高齢者の薬を飲んだりという事例から、チャイルドレジスタンスでシニアフレンドリーな二段階ロック型の小型(携帯)ピルケースを、企業と専門家が共同開発し、品質を認定するなど、汎用され、かつ、コスト面も抑えられる方法の検討が必要であると考えます。

また、事故防止に対する保護者の意識の向上が不可欠であり、医薬品の誤飲事故が多発していること、入院を要する事例が発生していることを、広く情報提供し周知する必要がある。啓発パンフレット等の作成のみならず、視覚に訴える動画を作成し、政府広報(テレビ)やインターネット上、薬局の待合でビデオを流す等がより効果的であると考えます。